語用論的見地から見た文化の翻訳可能性

ベルゲン大学・ノルウェー　ノルデンシュタム・トーレ

シンポジウムの開催趣旨によれば、「文化の翻訳可能性」というテーマは非ヨーロッパ世界の近代化との連関で見られている。そこでは「近代化」は明らかに、高度産業化され技術的にもっとも発達した現在のヨーロッパ域諸域における近代モデルへ向かう歩みとして、規定され解釈されている。近代化はかくしてヨーロッパ文化の「翻訳」にして輸入というほどの意味となる。ユルゲン・ハーバマスを思い起こさせる言い回しをするなら、絶対性を持たんと要求する「ヨーロッパの近代理性」は、生活世界を脅かすものと取られている。ここに生ずる問題は、非ヨーロッパ世界がこの文化的圧迫のもとで果たして、且ついかに「自らの精神的・文化的アイデンティティ」を保持しうるか、だとされる。

私は文化―科学―テクノロジー―理性―翻訳―近代化という広い複合連関を、倫理の領域に目を向けることによって別の徴表のもとで扱いたいと思う。倫理的な考えと態度とは、近代化のプロセスやその他の諸形式における変化に対して、他の生活領域よりももっと抵抗するもののように思われる。倫理的領域の諸例を借りて、冒頭に要約したシナリオとは反対の近代像を以下に企てようと思う。

アラビア語のird, sharaf, そしてkarāma, といった倫理的表現を、英語とかドイツ語とかに翻訳するということは、何を意味するだろうか。ヴェール・コーワンのアラビア語・英語辞典は、アラブ的倫理のこれらの根本概念について次のように教えている。

ird : "honor, request ; dignity" (S.604)

sharaf : "elevatedl place" ; (a) high rank, nobility, distinction, eminence, dignity ; honor, glory" (S. 467)

karāma : nobility ; high-mindedness, noble-heartedness, generousity, magnanimity ; liberality, munificence ; honor, dignity ; respect, esteem, standing, prestige ; mark of honor, taken of esteem, favor ; …miracle (worked by a saint)" (S.822)

アラブ的倫理の中心部がここに簡潔に要約されている。辞書の説明は、ird, sharaf, karāma, といった諸概念が密接に連関し、広く重なるということを明らかにしている。ただし辞書が明らかにできないところもある。それはどのような関わりのうちでこれらの概念が正確に互いに関係しあい、どの点でそれらが異なっているかということである。このことは、これらの表現を語るいろいろの人々の実際の用法に関して、根本的な研究が要請されるということである。

以下のような問いを立て、それに答えなければならない。すなわち、すべての人間がird, sharaf, そしてkarāmaを持つのだろうか。もしただ幾人かのみがこれらの徳をもつなら、いかにしてそのことは説明され得るだろうか。人はird, sharaf, そしてkarāmaを失うことがあり得るだろうか。いかにしてであろうか。これらを失ったとき、また取りもどすことは出来るだろうか。いかにしてであろうか。ird, sharaf, そしてkarāmaを喪失することの帰結は何であろうか。

これらの表現の用法を定めるパラディグマ的な例を示しておかねばならない。さてird, sharaf, そしてkarāmaといった諸表現は多様な活動の中に組み込まれている。これらの活動は他の諸文化圏の人間には知られていないがゆえに、上の諸表現はあれこれの仕方で説明されねばならない。このことは、受け取り手の言語能力とならんで、彼の知識もまた拡大されねばならないということである。このような受け取り手の能力の二面的な拡大は、まさに文化の翻訳に特徴的である。それも異文化間（アラブ文化―ヨーロッパ文化―マヤ・インド文化―十九世紀ドイツ文化、等）の翻訳と並んで、広域的な文化の内部の異領域間の翻訳（たとえばある医学の専門領域や法律上の専門用語で草された判決のポピュラー化）に特徴的である。すなわち文化の翻訳という現象は、複合文化のなかに置かれた日常生活、たとえば現代のノルウェーやドイツやイギリスなどのそれ、に属しているのである。